

サイコパスな先輩に全身性感帯であることがバレました。徹底的にいじめ抜かれて快感♡  
体験版

1

金曜日の夜。歓楽街の中心に位置する大型の居酒屋は、週末の解放感に浸るサラリーマンやOLたちの喧騒で満ち溢れていた。ビールジョッキがぶつかり合う鈍い音、誰かの甲高い笑い声、店員がオーダーを通す活気ある怒声。それらが混ざり合い、熱気となつてフロア全体に充満している。

私が勤めているのは、都内にある中堅の専門商社だ。風通しが良い社風と言えば聞こえはいいが、とにかく体育会系のノリが色濃く残っており、歓送迎会、キックオフ、プロジェクトの打ち上げ、さらにはただの週末の慰労会など、何かと理由をつけては飲み会が開かれる。入社してまだ二ヶ月目の私、西村菜（にしむらしおり）にとっては、この頻繁な飲み会は正直なところ少しばかり苦痛な時間だった。

「ほーら西村ちゃん、グラス空いてるよ！ 次何飲む？ やっぱりカクテル系？ それとも思い切って日本酒いっちゃう？」

私の右隣に陣取り、ねっとりとした視線と甘ったるい声で絡んでくるのは、営業部でも一、二を争う遊び人として有名な先輩、片桐だった。彼はブランド物のスーツを着崩し、髪にはワックスをたっぷり揉み込んでいる。社内では成績も良く、女性社員への手広さでも名を馳せている危険人物だ。今日の飲み会でも、開始早々から私の隣の席をキープし、隙あらば肩や背中にボディタッチをしてくる。

「あ、いえ……私、お酒はあまり強い方じゃないので、ウーロン茶で大丈夫です。片桐先輩こそ、もうかなり飲まれてますよね？」

私は引きつりそうになる頬の筋肉を必死に動かし、愛想笑いを浮かべながらグラスを手で覆った。私の性格の厄介なところは、こういう場面でキツパリと「やめてください」「無理です」と本音を言えないことだ。表面上はノリ良く会話を合わせることができると、周囲からは「付き合いの良い明るい新人」と思われている。だがその反面、人に嫌われない、空気を壊したくないという臆病な本音が常に邪魔をして、強引な相手に対して防波堤を築くことができない。

「えー？ ウーロン茶なんてつままないこと言わないでさあ。俺が特別に美味しいお酒、作ってあげるから。ね？ ほらほら、これも社会勉強の一環だよ！」

片桐は私の遠慮など全く意に介さず、強引に私のグラスを取り上げると、テーブルにあつた焼酎のボトルを引き寄せた。ドクドクと並々注がれる透明な液体に、強いアルコールの匂いが鼻を突く。

「さ、西村ちゃんのために俺が作った特製レモンサワー！ これ飲んだら、もつと仲良くなれる気がするな。ていうかさ、西村ちゃんって普段どんな休日の過ごし方してるの？ 今度の日曜とか空いてない？ 俺、良いドライブコース知ってるんだけどさ」

片桐の顔がグツと近づいてくる。アルコールと、彼がつけているきつい香水の匂いが混ざり合い、私の胃の奥を不快に刺激した。彼の視線は私の顔だけでなく、ブラウスの胸元や、タイトスカートから伸びる太腿のあたりを品定めするように舐め回している。

ぞわりと、背筋に悪寒が走った。まるで自分がショーケースに並べられた商品にでもなったかのような、気味の悪い感覚。

（嫌だ……誰か、助けて……）

心の中でSOSを叫ぶものの、周囲の同僚たちは自分たちの会話に夢中で、私の窮状には全く気づいていない。あるいは、片桐の標的になった私に関わり合いになりたくないのかもしれない。私は手渡されたグラスを両手で持ち、チビチビと口をつけるしかなかった。濃すぎるアルコールが喉を焼き、胃に落ちていく。一杯、また一杯と、断りきれずに飲まされるうちに、私の視界は徐々に輪郭を失い、頭の芯がフワフワと浮き上がるような感覚に陥っていった。

「西村ちゃん、顔真つ赤だよ？ 可愛いねえ。……ねえ、この後さ、二人だけで抜け出さない？ もつと静かな店、知ってるんだよね」

ついに片桐の手が、私の太腿の上にポンと置かれた。その生温かい感触に、私の身体はビクツと硬直した。限界だった。これ以上この場にいたら、本当に取り返しのつかないことになってしまう。

「す、すみません……っ！ 私、ちよつとお手洗いに……！」

私は片桐の手を乱暴に振り払い、椅子を蹴立てるようにして立ち上がった。周囲が少し驚いたようにこちらを見たが、私は構わず足早に個室へと逃げ込んだ。

「はあっ、はあっ……」

トイレの個室に入り、鍵をかけた瞬間に、張り詰めていた糸がプツリと切れた。便座の蓋を下ろしてそこに座り込み、両手で顔を覆う。アルコールで火照った身体は異常なほど熱く、心臓が早鐘のように打ち鳴らされている。どうしていつもこうなるのだろう。どうして私は、嫌なことを嫌だとハッキリ言えないのだろう。自分の気の弱さが心底恨めしかった。

しばらくして、少しだけ呼吸が整ってきたところで立ち上がり、洗面台の鏡を見る。そこに映っていたのは、目元がトロンと赤く染まり、口元がだらしなく緩んだ、見知らぬ自分の顔だった。髪は少し乱れ、ブラウスの第一ボタンが開いて鎖骨が露わになっている。

（これじゃあ、まるでお持ち帰りしてくださいって言ってるようなものじゃない……）

私は慌てて冷たい水を出して顔を洗い、ブラウスのボタンを留め直した。どうやってあの席に返ろうか。いや、もうこのまま帰ってしまおうか。でも、バッグも上着も席に置いたままだ。こっそり取りに戻るにしても、片桐に見つかればまた引き止められるのは火を見るより明らかだった。

重い足取りでトイレの扉を開け、薄暗い廊下へと出る。居酒屋の喧騒は少し離れた場所から聞こえてくるが、この廊下は比較的静かだった。どうしよう、と途方に暮れて俯いたまま歩き出したその時だった。

「……おつそ。便器に顔突っ込んで寝てんのかと思ったぞ」

頭上から降ってきた、氷のように冷たくて、けれどどこか聞き慣れた低い声。

ビクツと肩を震わせて顔を上げると、そこには薄暗い廊下の壁に背中を預け、腕を組んでこちらを見下ろしている高い影があった。

「瀬戸、先輩……」

そこにいたのは、同じ営業部の先輩、瀬戸誠也（せとせいや）だった。今年で三十一歳になる彼は、高身長でモデルのように均整のとれた体格をしており、整った顔立ちには社内の女性社員からも人気が高い。しかし、その瞳は常に絶対零度のように冷え切っており、滅多に笑わない。仕事ぶりは完璧で隙がないが、口を開けば容赦のない毒舌が飛び出すため、後輩たちからは「サイコパス」「血が通っていない」と恐れられている存在だった。

私も入社以来、彼の指導を受けることが何度かあったが、少しでも反論しようものなら鼻で笑われ、コテンパンに論破されるのが常だった。私は私の防衛本能として、彼に対しては少し気の強い態度をとってしまうのだが、瀬戸先輩はそんな私の反応が面白いのか、何かにつけてからかってくるのだ。

「なに、その顔。幽霊でも見たような顔しやがって。それとも、便所飯でも食ってたのか？」

瀬戸先輩は呆れたようにため息をつきながら、私に一步近づいてきた。

「べ、便所飯なんてしてません！　ちよつと気分が悪くて、休んでただけです……」

私はムキになって反論した。弱っているところを見透かされたくなくて、つい声が尖ってしまふ。

「ふうん。まあ、あんな発情した猿に絡まれてりゃ、気分も悪くなるわな。お前、ほんとの隙だらけのバカ女だな。嫌なら嫌って顔面殴ってやればいいだろうが」

「殴れるわけじゃないじゃないですか！ 先輩みたいに、誰に対しても冷酷無比になれる人ばかりじゃないんです！」

「冷酷無比とは心外だな。俺はただ、無駄な感情労働をしたくないだけだ」

瀬戸先輩はフツと冷笑を漏らすと、私の顔をじつと覗き込んできた。その漆黒の瞳に射抜かれ、私は思わず息を呑んだ。彼の瞳の奥には、いつも何か底知れぬ暗い欲望が渦巻いているような気がして、見つめられると無意識に身体が栗立つのだ。

「で？ どうするんだ。あの席に戻る気か？ あいつ、お前がトイレに立った後、お前のバッグの中身あさって家の鍵探してたぞ」

「えっ……！？ うそ……」

血の気が引くのがわかった。片桐ならやりかねない。もし本当に鍵を奪われていたら、最悪の事態になりかねない。

「うそなわけあるか。ほらよ」

瀬戸先輩はポケットから、ジャラリと音を立てて何かを取り出した。それは、見覚えのあるキーホルダーがついた、私の家の鍵だった。さらに、反対の手には私のバッグと薄手のカーディガンが握られていた。

「せ、先輩……これ、どうして……」

「あいつが手を伸ばす前に、俺が回収しておいただけだ。『西村は酔い潰れて帰った。荷物は俺が預かる』って言ってな」

「あ……ありがとうございます……っ」

普段は意地悪で冷たい先輩が、まさか私を助けるために動いてくれたなんて。不意に差し出された優しさに、アルコールで緩んだ涙腺がツンと刺激された。

「勘違いするなよ。あんな猿と同じ空気を吸ってるのが耐えられなくて、帰る口実にお前を使っただけだ。アイツにノコノコついていく女じゃねえだろ、お前は。ほら、俺が送るからさっさと歩け」

瀬戸先輩は私の荷物を片手に持ったまま、もう片方の大きな手で私の腕をグツと掴んだ。強引だが、決して痛みを感じない絶妙な力加減。彼の体温が腕越しに伝わってきて、ひどく安心感を覚えた。

「……はい。すみません、お言葉に甘えます」

私は素直に頷き、彼の広い背中を追うようにして居酒屋を後にした。

店を一步出ると、春先の夜風が火照った頬を撫でていった。ネオンサインが瞬く繁華街を、瀬戸先輩は私の歩幅に合わせて少しゆっくりめに歩いてくれている。

「ふう……夜風が気持ちいいですね」

「お前、どんだけ飲まれたんだ。顔、茹でダコみたいに真っ赤だぞ」

「茹でダコって……ひどい。先輩こそ、全然酔ってないみたいですけど、本当にお酒飲んだんですか？」

「俺は酒には飲まれねえの。お前みたいに、自分の限界もわからずにガブガブ飲むアホとは違うんだよ」

口を開けば相変わらぬの毒舌だが、それでも今は彼の隣を歩いているという事実だけで、不思議と心が安らいでいた。いつもなら言い返してやるのに、今日はアルコールのせいか、彼の毒舌すら心地よく感じてしまう。

「へへ……先輩、優しいんですね。会社だとあんなに怖いのに」

私がふにやりと笑って見上げると、瀬戸先輩は一瞬だけ足を止め、信じられないものを見るような目で私を見下ろした。

「……お前、本物のバカか？俺が優しい？冗談は寝言で言え。俺の恐ろしさを知らないからそんな能天気なことが言えるんだ」

彼の瞳の奥が、獲物を前にした肉食獣のように妖しく光った気がした。だが、酔った私の頭は危険信号を完全に無視していた。

「えー？でも、助けてくれたじゃないですかあ……」

と、その時だった。急に足元がぐらりと揺れた。いや、揺れたのは地面ではなく、私の視界だった。外の空気に触れて血行が良くなったせいかな、先ほどまで胃の中で大人しくしていたアルコールが一気に自己主張を始めたのだ。世界がぐるぐると回転し、強烈な吐き気が込み上げてくる。

「う、う……っ」

「おい、どうした」

「気持ち、悪……っ」

駅の改札まではまだ距離がある。私はたまらず、路地裏の電柱の陰にへたり込むようにしゃがみ込んでしまった。口元を手で押さえ、必死に胃袋の逆流を堪える。

「おいおい、ここで吐く気か？ 勘弁してくれよ」

頭上から聞こえる瀬戸先輩の声に、焦りと苛立ちが混じっている。

「ごめつ、なさい……でも、ほんとに、無理……っ」

今にも戻してしまいそうなほどの吐き気。涙目でうずくまる私の前に、瀬戸先輩が片膝をついてしゃがみ込んだ。

「チッ……世話の焼ける女だな。こんなところで吐かれたら、俺まで疑われるだろ」

彼は舌打ちをすると、私の脇の下に両手を差し入れ、強引に立ち上がらせた。

「ぎゃっ……！ せ、先輩……？」

「歩けるか？ あんま、無理すんなよ。……入るぞ」

「え……？ 入るって、どこに……？」

朦朧とする意識の中、私が顔を上げると、そこにはけばけばしいピンクや紫のネオンサインを輝かせる、巨大な城のような建物があった。入口には『REST 4500YEN』という文字が煌々と光っている。

ラブホテルだった。

「ちよっ、先輩！？ ここって……っ！」

「うるせえ。吐くならトイレで吐け。俺はお前のゲロまみれになりたくないんだよ」

「で、でも……こんなところ……っ！」

「いいから黙ってついてこい。お前の今の顔、誰かに見られたらそれこそ一発で社会的に終わるぞ」

瀬戸先輩の腕の力は強靱で、反抗する隙すら与えてくれなかった。彼は私を半ば抱き抱えるようにして、ホテルの自動ドアを潜り抜けた。薄暗いエントランス。甘ったるい芳香剤の匂い。タッチパネルで部屋を選ぶ瀬戸先輩の横顔は、普段の冷徹な仮面の下に、何か別の――もつと恐ろしくて、ドロドロとした暗い欲望を隠し持っているように見えた。

ガチャン、と重い扉が閉まり、私たちは密室へと隔離された。それが、私の平凡な日常が完全に崩壊し、このサイコパスな先輩の『おもちゃ』として徹底的にいじめ抜かれ、快楽の底なし沼へと引きずり込まれる、すべての始まりだった。